

『クリスタベル』論

——“sorrow and shame”——

野村孝司

S. T. Coleridge (1772-1834) の未完の傑作詩 *Christabel* は三回にわたって書かれた。すなわち第一部は1798年に Sommerset 州の Stowey で、第二部はドイツ留学後の1800年に Cumberland 州の Keswick で、そして「第二部の結論」は1801年に同じ場所で書かれた。

「第二部の結論」は当初は書簡の中で彼の息子 Hartley に関連して書かれたものであり、*Christabel* に付け加えられたのが1816年であり、またその内容が Bostetter の言葉を借りて言えば、暗号文 (cryptogram) であり、「正確に意味を解明することは不可能に近い」⁽¹⁾ と言い切っているように、難解であったためか、学者の間では従来、この「第二部の結論」とはかく無視されて来た傾向があった。例えば *Christabel* の最初の本格的な研究であるとされている *The Roop to Tryermaine* (1939) の著者 Nethercot はその中で「第二部の結論」に言及して、次のように言っている。

“The Conclusion to Part II”, written in 1801, is little more than an expression of Coleridge’s paternal sentiment toward his young son Hartley, and adds nothing to help solve the mystery which he here left dangling to baffle posterity.⁽²⁾

また最近の学者では G. Watson が彼の著書 *Coleridge the Poet* (1966) の中で次のように言って、原詩との関連性を否定している。

The Conclusion to Part II... is an affectionate tribute to the three-year old infant Hartley which has little demonstrable connection with

the rest of the poem, though the ‘sweet recoil of love and pity’ (1.672) might refer to Sir Leoline’s rejection of his daughter Christabel when she begs him to send Geraldine away.⁽⁶⁸⁾

しかしながら Coleridge がこの「第二部の結論」を付け加えて *Christabel* を発表する前年つまり1815年のある書簡の中で彼は次のように書いている。

The Common end of all *narrative*, nay, of *all*, Poems is to convert a *series* into a *Whole*: to make those events, which in real or imagined History move on in a *strait* Line, assume to our Understandings a *circular* motion—the snake with it’s Tail in it’s Mouth.⁽⁶⁹⁾

この文からも推測されるように、余り関係のない詩句を「第二部の結論」として付け加えるということは、詩の全体性 (wholeness) 一口と尾が結ばれている蛇のような “*circular motion*”—を主張する Coleridge にとっては、ありそうにないことである。もし彼が詩の全体性を無視して「第二部の結論」を、あまり関係のないものとして付け加えたのなら、たとえ未完の詩であるとはいえ、詩人 Coleridge の失敗を意味するであろう⁽⁶⁹⁾。それゆえこの「第二部の結論」を無視することは詩人 Coleridge を無視することになる。

この「第二部の結論」は *Christabel* を書いたことに対する “Coleridge’s apologia” であろうと、鋭い洞察力を持って言ったのは H. Bloom (1961)⁽⁶⁹⁾ であるが、単に示唆するに留まった。その他 P. Basler (1948)⁽⁷⁰⁾, V. Radley (1966)⁽⁶⁸⁾, G. Yarlott (1967)⁽⁶⁹⁾, G. Enscoe (1967)⁽¹⁰⁾, P. M. Adair (1967)⁽¹¹⁾ などの最近の研究者達も「第二部の結論」に言及はしているけれども、その積極的な解明を試み、この詩全体の統一調和した解釈を与えていない。ただ一人例外の学者は E. E. Bostetter (1963)⁽¹²⁾ である。彼はこの「第二部の結論」の積極的な解明を試み、その論文は高く評価することができよう。この小論も彼の努力に負うところが大きい。しかしながら彼の努力にもかかわらず、彼の見方はこの詩全体の統一した解釈つまり Coleridge の云う “*circular*” な解釈という点において、いささか欠けているようである。この辺を検討しながら、*Christabel* に統一し調和ある “*Whole*” を持つ解釈を試みるのがこの小論の目

的である。

× × ×

まず暗号文と言われている「第二部の結論」を見よう。

A little child, a limber elf,
 Singing, dancing to itself,
 A fairy thing with red round cheeks,
 That always finds, and never seeks,
 Makes such a vision to the sight
 As fills a father's eyes with light ;
 And pleasures flow in so thick and fast
 Upon his heart, that he at last
 Must needs express his love's excess
 With words of unmeant bitterness.
 Perhaps 'tis pretty to force together
 Thoughts so all unlike each other ;
 To mutter and mock a broken charm,
 To dally with wrong that does no harm.
 Perhaps 'tis tender too and pretty
 At each wild word to feel within
 A sweet recoil of love and pity.
 And what, if in a world of sin
 (O sorrow and shame should this be true!)
 Such giddiness of heart and brain
 Comes seldom save from rage and pain,
 So talks as it's most used to do. (ll. 656-77)

この詩の原稿は、前にも触れたように、1801年5月6日付の Southey 宛の書簡の中で書かれたものであり、この詩のすぐ前に次のような文が書かれている。

—Dear Hartley! we are at times alarmed by the state of his Health
 —but at present he is well—if I were to lose him, I am afraid, it would
 exceedingly deaden my affection for any other children I may have—⁽¹³⁾

またこの詩のすぐあとには “A very metaphysical account of Fathers calling
 their children rogues, rascals, & little varlets”⁽¹⁴⁾ と書かれているところか。

ら、この詩は彼と当時4才半の彼の息子 Hartley との関係を歌ったものであることは明らかである。

赤くまるい頬をして歌ったり踊ったりし、いつも見つけるばかりで決して探すことをしない可愛い子供は、父親を大いに喜ばせる。あまり喜びが大きいので、どうしても父親は子供に対して“love’s excess” (l. 664) を“words of unmeant bitterness” (l. 665) で表現することになる。この二つの全く異なる“thoughts”を無理に結び合わせることは“pretty”である。この“pretty”なる語は“strange word to use”⁽¹⁵⁾と Bostetter も言うように、理解しにくい。が、“delightful”または“pleasing”と解せよう。また“wild word”を言うとき、心のうちに“A sweet recoil of love and pity” (l. 672) を感ずることは、“tender”であり“pretty”である。さてその次が問題の個所である。もしこの世で、(ああ悲しみであり恥である、このことがもし本当だとすれば) 普通世人が言っているように、かような心と頭の眩惑が、怒りと苦痛とから大抵は来るものであればどうであろう。

この最後の個所に言及した人は Bloom, Bostetter, そして Yarlott である。Bloom はこの個所について、“the ecstasy of such aesthetic emotions as love and pity may result only from rage and pain...”⁽¹⁶⁾と言い、Bostetter は“‘And what if ‘in a world of sin’ such giddiness of heart (the ‘sweet recoil of love and pity’?) comes usually only from rage and pain, and ‘so talks as it’s most used to do’?’”⁽¹⁷⁾あるいは“‘O sorrow and shame should this be true!’ he exclaims at the recognition in himself of the dependence of love and pity upon rage and pain.”⁽¹⁸⁾と説明している。この二人の学者は“Such giddiness of heart and brain” (l. 675) を“A sweet recoil of love and pity” (l. 672) と考えている。もっとも Bostetter は上文中で分かるように疑問符を付けており自信がないようである。そして Bostetter はこの個所は“the most tortured and obscure”⁽¹⁹⁾であると言う。“in a world of sin” (l. 674) があるので惑わされるが、これはこの世つまり世俗社会を意味しよう。

そして最も難解にして“obscure”な語句“Such giddiness of heart and brain”は Yarlott が一言だけではあるがそれに言及して、“‘giddiness of heart and brain’ that produces ‘wild’ words of ‘unmeant bitterness’”⁽²⁰⁾と解釈している。私も彼に賛成である。「心と頭の眩惑」は、相異なる思想つまり“love’s excess”あるいは“a sweet recoil of love and pity”と“words of unmeant bitterness”あるいは“wild word”のうち、憎しみに根差すであろう後者、すなわち「心にもない苦い」「荒い言葉」を生み出すような精神状態を指しているとするのが妥当であろう。かように“Such giddiness of heart and brain”が解釈できれば、普通世間一般で言われているように、「心にもない苦い」「荒い言葉」が出て来るような精神状態が通常“rage and pain” (l. 676) から生ずるということは正常な精神であり、これはそれほど非難する必要のないことであろう。そう考えてくると、“O sorrow and shame should this be true!” (l. 674) 中の「ああ悲しみだ恥だ」は何に対して言っているのであろうか。恐らくこれは、この“this”を指しているのではなく、実際はすぐ上の“love’s excess”あるいは“A sweet recoil of love and pity”と“words of unmeant bitterness”あるいは“wild word”という愛と憎しみの全く相異なる二つの“thoughts”の併存状態を指していて、それに対して、“sorrow”であり“shame”であると言ったのだと考えねばなるまい。

かように「第二部の結論」が解釈されると、これは原詩に対していかなる関係があるのかが次に問題になる。これについて考えてみよう。前にも言及した「第二部の結論」の最後のところに出て来る“rage and pain” (l. 676) であるが、これは Bostetter の解釈のように、Sir Leoline の“rage and pain” (l. 638) や“pain and rage” (l. 640) とはせいぜい表面的な類似性があるだけであり“The basic situations are radically different.”⁽²¹⁾という苦し紛れの言葉を吐かなくても済む。“radically the same”なのである。Sir Leoline の“wild word”は Bard Bracy に向かって、“stern regard” (l. 648) と“tones abrupt, austere” (l. 650) で言った“Why, Bracy! dost thou loiter

here? / I bade thee hence!” (l. 651-2) だけであって、Christabel に向っては直接には言われていないが、彼の精神状態である “giddiness of heart and brain” からすると Christabel に向っても “wild word” を言う状況にあった。とすれば、たとえ Yarlott の分析のように、Sir Leoline の心の中に友達の娘というよりは異性としての意識があった⁽²²⁾にしても、仲違いはしたが現在でも愛している友人 Sir Loland の娘に “hospitality” (l. 644) を与え、仲直りをしようとする意図があった Sir Leoline に、Christabel が “By my mother’s soul do I entreat / That thou this woman send away!” (ll. 616-7) と、今まで “so bright a dame” (l. 402) であり “a thing divine” (l. 476) と思っていた “beautiful daughter” (l. 503) に対して言われたとすれば、彼の “rage and pain” は正常なものであったと解することができる。Sir Leoline は evil な点から見れば、まことに単純な男でむしろ罪なきは Christabel に等しいと考えられる。もっとも彼の心の中にも “If thoughts, like these, had any share” (l. 637) のように二重性は見られるけれども、真相が分かれば解決される問題であって、深刻なものではない。また第二部の執筆と「第二部の結論」のそれとの間には8ヶ月余り⁽²³⁾の時間の経過があるのみであり、J. L. Lowes が指摘したような “memory, tenacious and systematizing”⁽²⁴⁾ あるいは “an almost uncanny power of association”⁽²⁵⁾ の持主である Coleridge が、“Within the Baron’s heart and brain” (l. 636) と “Such giddiness of heart and brain” (l. 675) や “They only swelled his rage and pain” (l. 638) と “Comes seldom save from rage and pain” (l. 676) における類似を考えるとき、Bostetter その他が言うように “radically different” な意味で書くであろうか。ありそうにもないのである。では愛していながら、その「愛の過剰」のために「心にもない苦い言葉」や「荒い言葉」を吐く sorrowful で shameful な evil act を行なうものは誰であろうか。言うまでもなく妖怪美人 Geraldine である。

Christabel は何の罪もない娘 “The maid, devoid of guile and sin” (l. 599)

の受難の物語りである。この点 Gillman 解釈も Derwent 解釈も一致している。この二種の解釈は *Christabel* 研究においていつも引き合いに出されるのであるが、両者の相違点は、Gillman 解釈⁽²⁶⁾では、Geraldine を “the power of evil” あるいは “the wicked” としているのに対して、Derwent 解釈⁽²⁷⁾では Geraldine を “no witch or goblin, or malignant being of any kind, but a spirit, executing her appointed task with the best good will” としていることである。かように Geraldine の性格が善か悪かの相反する方向に意見が分れていることは、彼女の性格の複雑さを物語っており、どちらともたやすく言い得るものではない。ただ言えることは Gillman 解釈では、この詩の続きが書かれており、それは Geraldine が恋人の騎士に化けて、Christabel と結婚式をあげている最中に、本当の騎士が現われ Geraldine はその正体がばれ、消え去り、Christabel と騎士とは結ばれ、父と子との仲直りもでき、万事めでたしめでたしの筋であるが、これはいかにもゴシック小説風の結末であって、納得できないのである。かような詩の続きであれば、いくら家庭不和、Sara Hutchinson への恋、形而上学への傾倒、リューマチス、阿片の服用、経済的貧困、*Lyrical Ballads* の出版に際して *Christabel* が除外されたこと、仲違いしている Lloyd が近くへ住みついたことなど悪条件が重なったにしても、あれだけゴシック小説を読んでいた “a library-cormorant”⁽²⁸⁾ の Coleridge にとって、書き続けることができぬ筈はない。それができなかったのは何か他に重大な理由があったと考えられる。次に Derwent の Geraldine 天使説であるが、天使とまで言い切れないにしても Geraldine の Christabel に対する態度を見るとき、それに近いものを案外含んでいるように思われる。単に Geraldine を vampire や lamia の類に解釈するならば、この詩の真の意味を解することはできない。では「第二部の結論」の中心課題であった “love’s excess” と “wild word” との愛憎併存感情を考え合わせながら Geraldine の Christabel に対する態度を中心にこの詩を検討してみよう。

この詩の女主人公である Christabel は、その名前の中に Christ を含んで

いることから分かるように、何の罪もない純真無垢な娘である。英国のとある古城の主である Sir Leoline の娘であって、彼は娘をこよなく愛している。ゴシック小説の手法である問答形式を駆使して、巧みに話が運ばれていく⁽³⁹⁾。この娘 Christabel は遠くの地にいるいいなずけの騎士の幸 (weal) を祈るために、夜遅く森へやって来たのである。樫の木の向うで何やら呻き声があるので行ってみると、そこにはすばらしい麗人 “A lady.../ Beautiful exceedingly!” (ll. 68-9) がいた。これが Geraldine であった。彼女は “sore distress” (l. 73) であり、“weariness” (l. 74) のために話すことが出来ないと言う。昨夜悪漢どもに襲われ、自分の城からここまで連れてこられたと言う。悪漢に襲われたとはいえ、かような状態で Geraldine が Christabel に最初に出会ったということは、何か Geraldine が思案しているように解することもできるであろう。Christabel は手を差し伸べ彼女を慰めると、Geraldine は “Her gracious stars” (l. 114) に感謝する。Derwent 解釈でいう天使説を支持する行動である。Christabel は彼女に今夜は私と一緒に寝ましようと言う。この二人は城の中の Christabel の部屋まで行くのであるが、その間に四つの不思議な出来事がおこる。第一は城に入るとき、Geraldine は苦痛のため “threshold of the gate” (l. 132) で歩けなくなり、Christabel が手伝っておこしてやると、もう苦痛がなかったかのように歩み続ける。第二は城壁まで来たとき、Christabel が彼女にマリヤ様に感謝するようにと言うと、“Alas, alas!.../ I cannot speak for weariness” (ll. 141-2) と言って断わる。第三は歯の抜けた番犬が、彼等が通りがかりに今まで Christabel の前では一度も呻き声をあげたことがなかったが、怒りの呻き声をあげる。第四は二人が広間を通り過ぎるとき、今まで炉の燃えさしは今にも消えそうであったものが、急にパッと炎をあげる。これらの一連の超自然的な不思議な事件は、Geraldine の vampire あるいは lamia 解釈を可能にするものであろうが、最近では Coleridge の *Notebooks* が出版されるにおよび、この魔女 Geraldine が Coleridge の nightmare に由来するものであることが指摘されている。この最初の指摘者は *Notebooks* の

編者 K. Coburn であった⁽³⁰⁾。1800年11月に次のような悪夢についての手記がある。

... a most frightful Dream of a Woman whose features were blended with darkness catching hold of my right eye & attempting to pull it out—I caught hold of her arm fast—a horrid feel...⁽³¹⁾

1802年10月にも次のように手記で言っている。

I was followed up & down by a brightful pale woman who, I thought, wanted to kiss me, & had the property of giving a shameful Disease by breathing in the face.⁽³²⁾

1803年12月にもケンブリッジ時代の Harlot の夢を見ている。“The Harlot in white with her open Bosom certainly was the Cambridge Girl, <Sal Hall> ...”⁽³³⁾ 従って一見超自然的な魔女にみえる Geraldine も、もちろんその要素は充分備えているけれども、単にそのように単純に考えることはできないのである。夢という作者の内奥の体験ののっぴきならぬところから出て来ていると思われる。それゆえ、この魔女 Geraldine は極めて性格が複雑で人間臭いのである。

Geraldine が疲れ果てあわれな姿で床に伏しているのを Christabel は見て、彼女の亡き母が野の花より作ったという “cordial wine” (l. 190) を Geraldine に勧めると、Geraldine は “And will your mother pity me, / Who am a maiden most forlorn?” (ll. 194-5) と言うのであるが、“most forlorn” は作者自身の境遇でもある。そのあとに Geraldine の “mother” に対する、二重性すなわちアンビバランスが現われる。

O mother dear! that thou wert here!
I would, said Geraldine, she were!
But soon with altered voice, said she—
‘Off, wandering mother! Peak and pine!
I have power to bid thee flee.’ (ll. 202-6)

この二重性、すなわち愛と憎との併存感情は不可解である。母に対する彼女の

この“wild word”は理解できぬ。この二重性は Christabel との関係になると一層はっきりしてくる。Beer はこの二重性こそ“the daemonic nature”の特徴であるとしている⁽⁸⁴⁾が果してそうであろうか。簡単に割り切れまい。

Geraldine は evil act を行なう前に次のようなことを言う。

‘All they who live in the upper sky,
Do love you, holy Christabel!
And you love them, and for their sake
And for the good which me befel,
Even I in my degree will try,
Fair maiden, to requite you well. (ll. 227-32)

この詩句は Geraldine は善意を持った“spirit”であるとする Derwent の解釈の根拠になっているものである。少しながいが Derwent 解釈を引用してみよう。

The sufferings of Christabel were to have been represented as vicarious, endured for her “lover far away”; and Geraldine, no witch or goblin, or malignant being of any kind, but a spirit, executing her appointed task with the best good will, as she herself says:—

All they, who live in the upper sky,
Do love you, holy Christabel, &c. (ll. 277-32).

In form this is, of course, accommodated to “a fond superstition”, in keeping with the general tenour of the piece; but that the holy and the innocent do often suffer for the faults of those they love, and are thus made the instruments to bring them back to the ways of peace, is a matter of fact, and in Coleridge’s hands might have been worked up into a tale of deep and delicate pathos.⁽⁸⁵⁾

McElderry などの Gillman 解釈支持の努力⁽⁸⁶⁾にもかかわらず、Coleridge の息子 Derwent が恐らく父の話の中で、何かの拍子に聞いたであろうこの Geraldine の“spirit”説は、多分に真理を含んでいるように思われる。特に注意したいのは、Geraldine の邪悪な行為について、“the holy and the innocent do often suffer for the faults of those they love”と言っている

部分である。愛されている人の“faults”によって、苦しむということは、最初に触れた「第二部の結論」の中の“love’s excess”と“words of unmeant bitterness”との併存感情を考え合わせれば、容易に理解でき、この詩全体の意図も分かるのである。

Geraldine は次に祈りを捧げねばならぬと言う。

But now unrode yourself; for I
Must pray, ere yet in bed I lie. (ll. 233-4)

なぜ evil act の前に祈りを捧げねばならないのだろうか。それに対する罪の意識であろうか。Geraldine は着物を脱ぐとき、何か恐れているようにみえる。

Like one that shuddered, she unbound
The cincture from beneath her breast: (ll. 248-9)

次に有名な詩句 “Behold! her bosom and half her side — — / A sight to dream of, not to tell!” (ll. 252-3) があり、そのあとに次の詩句が1816年に挿入されたのである。

Yet Geraldine nor speaks nor stirs;
Ah! what a stricken look was hers!
Deep from within she seems half-way
To lift some weight with sick assay,
And eyes the maid and seeks delay;
Then suddenly, as one died,
Collects herself in scorn and pride, (ll. 255-61)

これについては Coleridge が当時のこの詩に対する道徳的非難を考慮して挿入されたのであろうという説もあるが、Geraldine の性格の二重性を強調するために付け加えられたと見るべきであろう。“Collects herself in scorn and pride” 中の “scorn” と “pride” という対立する意味を持った言葉が並置してあることに注意せねばならない。自分のこれから行なおうとする evil act に対して “scorn” という自己侮蔑感を持ち自己の行為に対して否定的であると同時に、“pride” という自尊の念を持ちその行為に対して肯定的である。この

否定と肯定の接点において、Geraldine は気を取り直して Christabel を抱くのである。そして彼女のこの reluctance の中から次のことが云われる。

In the touch of this bosom there worketh a spell,
Which is lord of thy utterance, Christabel !
Thou knowest to-night, and wilt know to-morrow,
This mark of my shame, this seal of my sorrow ; (ll. 267-70)

何の罪もない Christabel に対して Geraldine のなす邪悪な行為は、Geraldine の言う「自分の程度において」愛することなのであろうか。この二重性あるいはアンビバランスにおける邪悪な行為に対して、“my shame” “my sorrow”と言ったのであろう。「第一部の結論」においても Christabel の夢の中で“O sorrow and shame !” (l. 296) と言われているが、“shame”とは他人に対して自己の行為に面目を失うことであり、“sorrow”は自己から出て自己に向かい、結局は仕方がないという一種の諦観を伴う。「恥」のうちには未だ改善の余地が残るが、「悲しみ」にはそれがない。何か深いところから (“deep from within”) 絶対的なものに支配されているような感じを与える。そしてこの二つの言葉は後述するように、この詩全体の底流となって全体性を表わしているのである。またこの邪悪な行為は二重性の一面であるがため母親が子を抱くような愛の姿をとるのである。

And lo! the worker of these harms,
That holds the maiden in her arms,
Seems to slumber still and mild,
As a mother with her child. (ll. 298-301)

第二部に入ると、この Geraldine の二重性は幾分少なくなるとはいえ、なおかなりはっきり現われている。Geraldine は Christabel の父 Sir Leoline を誘惑することにより、間接的に Christabel を虐待しようとする。朝鐘の音で Geraldine は目を覚ますと、邪悪な行為に対する罪の意識のためか恐怖を払い除けねばならない。“And Geraldine shakes off her dread.” (l. 362)。また彼女は “a thing divine” (l. 476) であって “bright eyes divine” (l. 595)

を持ち、“sorrow”と“grace”とを併せ持っているように見えた。そして Geraldine は Christabel を虐待するときには“malice”よりも“dread”を多く持っていたのである。

And with somewhat of malice, and more of dread,
At Christabel she looked askance!—(ll. 586-7)

虐待が間接的に行われるというのは前に触れた通りであるが、そのことは、Christabel が Geraldine と Sir Leoline との抱擁の場面を見たり (ll. 437-51)、Geraldine が Sir Leoline と親しくしながら、Christabel を横目で見たり (ll. 567-81) したとき、Christabel がシューという蛇の拗音 (“a hissing sound”) を発することから分かるのである。

かように Geraldine の Christabel に対する態度には明らかに二重性あるいは愛憎併存感情を認めることができる。この感情は愛に根差す憎であり、憎に根差す愛である。その憎は、普通世間で言う“rage and pain”からのものではない。もっと罪深い邪悪なものである。これに対して Geraldine は“my shame”“my sorrow”と言ったのであり、この二重性あるいは愛憎併存感情は、上述の「第二部の結論」のそれと同一であろう。自分の子供に対して愛の過剰を“words of unmeant bitterness”で表わしたり、“wild word”を言うたびに心に“A sweet recoil of love and pity”を感じる心理とこの Geraldine の心理とは同一であると考えられる。この心理は Bostetter の言うごとく一種のサディズムであろうし (“the unwilling sadist”)⁽³⁷⁾、Derwent の言う “the faults of those they love” であろう。愛すれば愛する程また憎しみも増大するという感情。愛してはいるのであるが、どうすることもできない心の内奥から (“Deep from within”) 湧き出て来るその相手を虐待し (“wrong”) たいというのっぴきならぬ感情に対して、第一部では “This mark of my shame, this seal of my sorrow;” (l. 270) や “O sorrow and shame!” (l. 296) と Geraldine が叫びあるいは彼女によって魔力を掛けられた Christabel が夢みたのであり、「第二部の結論」においては、作者 Coleridge の心の内部の感情

に対して“O sorrow and shame...!” (l. 674) と叫んだのである。従って「第二部の結論」は原詩とあまり関係がないという Watson 等の説は否定されねばならないだろう。この「第二部の結論」における“O sorrow and shame...!”は、第二部における Geraldine の Christabel に対する二回の虐待に言及されていることはもちろん、第一部における“shame”や“sorrow”からもわかるように、第一部の Geraldine の心理にも密接な関係を持ち、この詩全体の底流となっている。従って「第二部の結論」は、第二部の結論であると同時に、この詩全体の結論ともなっていて、彼の主張する詩の“circular motion”を見事に具現していると言わねばならない。そしてこの Geraldine は作者 Coleridge その人であったと言えまいか。

この詩の未完の原因は上述のごとく雑多な要素も考えられるけれども、その中で最も大きな要素は彼の心の内奥に存する感情にあったと思われる。Coburn 以下多くの学者達が言うように Christabel の孤独な境遇に Coleridge が同情したために書き続けることができなかったという説も考えられるが、それよりもむしろ、その裏である Geraldine の気持が自分のものでもあり、そののっぴきならぬ邪悪な感情に対して shameful で sorrowful であると彼が感じ、書き続けることができなかったのではあるまいか。1800年11月といえれば彼が *Christabel* の第二部を書き終って二三ヶ月経ったときであるが、そのときの書簡に次のように書いている。

...I undertook to finish a poem which I had begun, entitled Christabel
...but the deep unutterable Disgust... seemed to have stricken me
with barrenness—for I tried & tried, & nothing would come of it.⁽³⁸⁾

自己の内奥にある感情、それは夢の世界や“semi-demi-conscious”⁽³⁹⁾と彼の言う無意識の世界の感情、人間の“inward nature”⁽⁴⁰⁾に根差す evil な“bad passions”⁽⁴¹⁾、それは Fogle の言葉を借りれば“her id”⁽⁴²⁾であろうが、その感情に対して“the deep unutterable Disgust”という自己嫌悪感を持っていたがために書き続けることができなかったのであろう。Gillman 解釈におけ

るゴシック小説風の結末であれば、Coburn もいうように⁽⁴³⁾ 空想力の “the fixities and definites”⁽⁴⁴⁾ を材料に扱うがために、容易に書き続けることができたであろう。

かくてこの詩は “O sorrow and shame...!” という底流に支えられて、Christabel 受難の物語を統一調和あるものにし、口と尾が結び合っている蛇のごとく、「円運動」を具現しているのである。そしてこの “shame” と “sorrow” という底流を考えると、この詩が未完であるがためにかえって激しく我々に迫って来るのである。(1968, 9)

注

- (1) Edward E. Bostetter, *The Romantic Ventriloquists: Wordsworth, Coleridge, Keats, Shelley, Byron* (Seattle, 1963), p.128.
- (2) Arthur H. Nethercot, *The Road to Tryermaine: A Study of the History, Background, and Purposes of Coleridge's "Christabel"* (New York, 1939), p.55.
- (3) George Watson, *Coleridge the Poet* (London, 1966), p.106. 文中の “the three-year old infant Hartley” は誤りである。Hartley は当時4才半であった。
- (4) Earl Leslie Griggs, ed., *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* (Oxford, 1959), IV, p.545.
- (5) Cf. Patricia M. Adair, *The Waking Dream: A Study of Coleridge's Poetry* (London, 1967), p.164.
- (6) Harold Bloom, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry* (New York, 1961), p.228.
- (7) Roy P. Basler, *Sex, Symbolism, and Psychology in Literature* (New York, 1948), pp.43-5.
- (8) Virginia L. Radley, *Samuel Taylor Coleridge* (New York, 1966), pp.75-6.
- (9) Geoffrey Yarlott, *Coleridge and the Abyssinian Maid* (London, 1967), pp.191-3.
- (10) Gerald Enscoc, *Eros and the Romantics: Sexual Love as a Theme in Coleridge, Shelley and Keats* (Paris, 1967), p.58.
- (11) Adair, *op. cit.*, pp.164-6.
- (12) Bostetter, *op. cit.*, “The Vision of Fear”, pp.118-32.
- (13) Griggs, *op. cit.*, II, p.728.
- (14) *Ibid.*, p.729.

- (15) Bostetter, *op. cit.*, p.128.
- (16) Bloom, *op. cit.*, p.229.
- (17) Bostetter, *op. cit.*, p.128.
- (18) *Ibid.*, p. 130.
- (19) *Ibid.*, p.129.
- (20) Yarlott, *op. cit.*, p.191.
- (21) Bostetter, *op. cit.*, pp.129-30.
- (22) Yarlott, *op. cit.*, p.185 : “. . . the Baron’s attitude to her seems less avuncular than infatuated. . .”
- (23) Kathleen Coburn, ed., *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge* (London, 1957), I, entries 798n : “I am inclined to think the composition of Part II belongs to the last two weeks of August. . .”
- (24) John Livingston Lowes, *The Road to Xanadu : A Study in the Ways of the Imagination* (London, 1927), p.43.
- (25) *Ibid.*, p.44.
- (26) Quoted by Humphry House, *Coleridge : The Clark Lectures 1951-52* (London, 1953), pp.127-8.
- (27) Quoted by House, *op. cit.*, p.127.
- (28) Griggs, *op. cit.*, I, p.260.
- (29) Watson, *op. cit.*, p.114.
- (30) Kathleen Coburn, “Coleridge and Wordsworth and ‘the Supernatural,’” *University of Toronto Quarterly*, XXV, (1956), pp.129-30.
- (31) Coburn, *op. cit.*, entries 848.
- (32) *Ibid.*, entries 1250.
- (33) *Ibid.*, entries 1726.
- (34) J.B.Beer, *Coleridge the Visionary* (London, 1959), p.189.
- (35) Quoted by House, *op. cit.*, p.127.
- (36) B.R.McElderry, Jr., “Coleridge’s Plan for Completing *Christabel*,” *Stud. Phil.*, XXXIII (1936).
- (37) Bostetter, *op. cit.*, p.131.
- (38) Griggs, *op. cit.*, I, p.643.
- (39) Coburn, *op. cit.*, entries 2073.
- (40) J.Shawcross, ed., *Biographia Literaria* (Oxford, 1907), II, p.6.
- (41) Coburn, *op. cit.*, entries 1770.

- (42) Richard Harter Fogle, *The Idea of Coleridge's Criticism* (University of California Press, 1962), p.132.
- (43) Coburn, "Coleridge and Wordsworth and 'the Supernatural'," *op.cit.*, p. 130.
- (44) Shawcross, *op. cit.*, I, p.202.